

翻 訳

ジョン・ノックスによる宗教改革文書 (2)

The Reformation Pamphlets by John Knox (2)

— スコットランド貴族と身分制議会に提出された

— 司教とカトリック聖職者により宣告された判決故のアペレイション (4) —

The Appellation from the Sentence Pronounced by the Bishops and Clergy: Addressed to the Nobility and Estates of Scotland (4)

伊勢田 奈 緒

1. 緒言
2. 翻訳

1. 緒言

本稿は1558年に執筆されたスコットランドの宗教改革者ジョン・ノックスの抵抗権の問題を扱っている論文「アペレーション」の続きである。尚、「アペレーション」とは、アピールの意味である。この「アペレーション」では、貴族層に対し、彼らの持つ宗教改革権とそれを通しての抵抗権の合法性を確信させ、その権利をどのように行使するか、その方法を提示した。彼は今回の箇所では、改革の具体的方法として偶像崇拜者を処罰することを示している。処罰されるべき対象が、偶像崇拜を行っている国王である場合、処罰権の発動は現実的には国王への反乱となるという処罰権の行使についてのキリスト教的論拠として、彼は出エジプト記から、神とキリスト教徒の国民との間の同盟と契約を用いて論じている。キリスト・イエスと福音が、王国、領土、あるいは都市に受け入れられたところはどこでも、偶像崇拜者を処罰すべきだとし、例としてイングランドのエドワード6世の時に偶像崇拜者を罰したことを評価している。他方、メアリー・チューダーを聖書の中の偶像崇拜者イゼベルにたとえ、彼女とその支持

者たちを処罰することは合法であるとしている。さらに偶像崇拜を樹立する者があれば、単に行政官だけでなく、国民もまた、神に対して行われる侵害に対して、その力の全てを尽くして報復しなければならないことを説いている。

尚、拙訳は一次史料Laing, David, ed. (1895), *The Works of John Knox*, vol.4 Edinburgh, pp.504-511の訳であるが、以下を参照した。

Roger A. Mason, ed. (1994), *John Knox, On Rebellion*, pp.102-107) *Selected Writings of John Knox*, Presbyterian Heritage Publications, 1995, pp.473-522

2. 翻訳

これらの前提で、私は次のことがはっきりとしていると思います。つまり、偶像崇拜に対する処罰（の権利）¹⁾は、王たちにだけ属するのではなく、その国民全体に属するのであり、そしてその人の可能性に従って、メンバーそれぞれに属しているのだと。というのは、それは、最大限の力をだしても、取り除かれないのであり、これらのことのために、嘆き悲しむ者はだれもいないことを確信

1) 拙者挿入

しています。もしこのことが、国民すべてに、また召されている者それぞれに求められているのなら、主よ、何が貴方方に求められるのでしょうか？神は、貴方方を貴方方の兄弟たちを支配する統治者や支配者として立てられました。神は貴方方の手に正義の剣をもたせ武装し、貴方方の王の怒りを抑制し、また、神の祝福すべき命令に明らかに背く時は常に、その王たちのおうへいさを抑圧するくつわとして命じられてきたのです。

この偶像崇拜者を罰することに關係して私の確信していることですが、もし、偶像崇拜の異教徒を発見し、悔いることを求める使徒たちの行為に反して、そうした罰を要求していないと思う者があれば、その人には、キリストが教えられる前、使徒たちが語っているように、世界には神がなく、偶像崇拜におぼれて、盲目で無知の中で生き、そして、そこでは、彼らは神を冒瀆する国として保たれ、神は決して神の民に公に認められず、王室に受け入れられず、宗教においても体制においても、守られない法を彼らに与えられていたことを、理解していただきたいのです。²⁾そして、だから、悔い改めをもとめる神の聖霊は、厳しい法に従って、彼らに体罰を必要としないのであって、そして、彼らはイスラエルの国からの異邦人であり、臣民では決してないのです。しかし、もし、異教徒たちが彼らのむなしい会話から呼ばれた後、キリスト・イエスを心に抱くことによって、アブラハムのメンバーの中に受け入れられ、そうして、信仰するユダヤ人とともに、一つの民となることを望む者があれば、また、もし、(私は言いたいのですが、) そのとき、彼らが、神が彼らと結んだ同盟や契約を確信したとき、神が神と神の民イスラエルとの間に結んだ同じ服従に結ばれていないと思うならば、その人は、それがキリストをモーセより下位に置いていて、天の父の法に反するように思えてくるのです。というのは、もし、モーセの法を

軽蔑し、あるいは、違反することが、死に値するというのなら、私たちは、キリストの聖礼典を(私は、それらが一度受け入れられた後のことを意味しているのですが)、軽視することを一体どう判断すべきなのでしょう？そして、もし、キリストが天の父の法を取り消すためにではなく、実現するために来られたのであれば、福音の自由には、神の父の特別な栄光がさげすまれ、踏みにじられ、誰にも尊敬されない場合があるということなのでしょう？決してそうではない！

神の特別な栄光は、神の民であることを告白する者が、神の声を良く聞くことなであります³⁾。そして、全ての中で、邪悪を罰する事に関係する世に現れる神の声が、はっきりとせず、厳しくもないというのは、偶像崇拜の教師たちや維持者たちに反対することを言わないのと同じことなのです。だから、私は、異教徒たちも(〔私が言う異教徒たちというのは⁴⁾〕異教徒たちの中であって、キリスト・イエスとその真の宗教を受容する、各都市、王国、領土、あるいは国民を意味するのですが)、神が国民の前で、次のような言葉で国民を根絶させることを約束する時に、神がその民イスラエルと結んだのと同じ同盟と契約に結ばれていることを、主張しないことを恐れるのであります。すなわち、「よく注意して、あなたがこれから入っていく土地の住民と契約を結ばないようにしなさい。ひょっとしてこれから、破滅へ、すなわち、あなたが破滅することにならないためである。しかし、あなたたちは、彼らの祭壇を破壊し、彼らの像を壊し、彼らの森を切り倒しなさい。他の神々を恐れ敬ってはならない。その神々を礼拝しても、いけにえを献げてもならない。しかし、主は、偉大なる力をもって、腕を広げ、あなたがたをエジプトから連れ出した。主はあなたがたを畏れさせ、あなたがたは、主を誉め称え、拝み、主に献げ物をし、神の法と裁きと律法と命令を守りなさい。こ

2) エフェソの信徒への手紙2章参照。

3) サムエル記上15章参照。特に15章22節「主が喜ばれるのは焼き尽くす献げものや生け贄である

うか。むしろ、主の御声に聞き従うことではないか。」

4) 拙著挿入。

れは、あなたがたと結ぶ契約であり、神が言われたことを忘れてはならないし、他の神々を恐れ敬ってはならない。しかし、あなたがたは、あなた方の神、主を恐れ敬いなさい、そうすれば、神はあなた方の敵、全ての支配からあなた方を救うであろう。」⁵⁾と。この同じ法について、私は言いたいのだが、契約はユダヤの民と同様に異教徒にも結ばれているのであります。神が領土や国民や都市の目に光を照らし、神の前で、彼ら⁶⁾が、それら⁷⁾が、忌まわしいものだと知っていたものとして、彼らの間から残虐非道な行為を取り除くために、彼らの手に剣をおき、それから、私は言いたいのですが、彼らが偶像崇拜を領土、都市、地方から一掃する義務があり、同様にイスラエル人たちはカナン⁸⁾の地⁹⁾の所有を受け入れる義務があったのであります。そして、さらに私は言いたいのだが、もし、偶像を建てようとして取りかかったり、あるいは、真理を受け入れ、認めた後に、神から背信することを教えようとしたりする者があれば、その時、剣は行政官に委ねられるばかりでなく、人々も、神と結んだ誓いによって、神に反する悪に対して復讐するためにありったけの力を出す義務があるのであります。

普遍的な背信と一般的な反逆について、ヤロブアム⁹⁾の後のイスラエルのように、さま

ざまな考察ができます。というのは、全国民が共に、神に反抗をたくらみ、神がイエフ¹⁰⁾を起こし、彼をその目的のために任命するまで、神の命じた罰が実行されるのを見いだされなかったからです¹¹⁾。そして、同様な事は、他の全ての一般的背信において考慮されることではありますが、今日、教皇制においてあるように、そこでは、すべてが盲目的で、神から墮落しています。それが長く続いたことで、普通の正義が実行出来ないというのではなく、罰するということが、神に保有されておこななければならない、神が命じる手段のため、とっておかなければならないということです。

しかし、私は言いたいのですが、神の完全な宗教を受け入れた後の多くの者が、大胆にその宗教を告白しました。にもかかわらず、いくらあるいは、多くの者が退くのです。(近頃のイングランドのようにですが。) そのような者たちについて、私は言いたいのですが、もし、どうしても神が、偶像崇拜者たちに力を与えるというのなら、偶像崇拜者たちを処刑することは合法的なことであるということです。というのは、(前の文の「いくらあるいは多くの者が退くのです」について¹²⁾) ヨシユアもそうしたように、イスラエルは、ルベン¹³⁾の子等に反することを決心し、マナセ¹⁴⁾は彼らの、神への背信を思ったからです。

5) 出エジプト記34章12-15節参照。

6) 異教徒たち

7) 偶像崇拜

8) カナンには異邦人であるカナン人がいた。

9) 北王国の初代の王(前922-901在位)。南王国ユダと戦い、またエジプトの王シシャク1世の侵入を受けた。民の宗教心を惹きつけるため、南王国ユダのエルサレムに対抗してベテルとダンの聖所を再興し、金の子牛の像を安置しヤールウェ礼拝の祭儀を制定した。最初はシケムを首都としていたが、防衛強化のためティルツアの砦を固めそこに都を移した。彼の一人ナダムが王位を継いだ、わずか2年でバシヤに殺害され、ヤロブアム1世の王統は短命に終わった。

10) 北王国イスラエル王(前842-815在位)。彼は預言者エリシャの支持を得てイスラエル第五王朝の初代の王となった。彼はイスラエルの王ヨラム、国王を訪問中のユダの王アハズヤ、またアハブの王妃イゼベル、さらにアハブの全一族、バアルの祭司たちをことごとく殺害した。

11) 列王記下9章参照。

12) 拙著挿入。

13) ヤコブの12人の子の長子。彼は父ヤコブが死ぬ時、長子であるが彼の奔放さによりその権利を失うと遺言された。そして事実、長子のヨセフに与えられた。

14) マナセはユダ王国の第14代の王。ヒゼキヤの後継者である。12歳で王に就いた。前王のヒゼキヤはアッシリア帝国の混乱期に、アッシリアの祭儀を取り除いて宗教改革を実施することができたが、マナセの時にはセナケリブが主権を回復して帝国内を安定させていたので、小国ユダは再びアッシリアの祭儀を取り入れざるを得なかった。マナセはアッシリアの忠実な家臣になることによって国内を安定させ、45年間、王位に就くことができた。

15) ヤコブの12人の子の末っ子ベニヤミンから始まる部族。あるレビ人のそばめにベニヤミン族の人々が乱暴して殺し、ベニヤミン族は全イスラエルと戦って破れ、部族滅亡の危機に陥ったことがある。

そして、全部族は偶像崇拜よりもむしろ、その罪のためにベニヤミン¹⁵⁾の部族に対して厳しい裁きを行いました¹⁶⁾。キリスト・イエスと福音が、王国、領土、あるいは都市に受け入れられたところはどこでも、(偶像崇拜者を罰することは¹⁷⁾) なされるべきなのであり、そして行政官たちと国民は、真剣に神の真理を守ることを誓い、最近、エドワード王¹⁸⁾の下、イングランドでなされたように(偶像崇拜者を罰することが¹⁹⁾) なされるべきなのであります。そのような場では、私は言いたいのだが、真の宗教を打倒することに骨を折る者を処刑することは合法的なことであるばかりでなく、(そのような行為をした²⁰⁾) 行政官たちや人々に、神の怒りは引き起こされないのでありましょう。それを行うことは、義務なのであります。だから、次のことを恐れず確信するのであります。つまり、イゼベル²¹⁾にたとえられる、女王メアリ²²⁾に抵抗するだけでなく、彼女と彼女を助ける者たちが、キリストの福音を圧迫し、神の聖徒らの血を流し、非常に悪魔的偶像崇拜とカトリック教徒の邪悪や暴政を起こすとき、そして一度共通の誓いによって、正しいとされた者が、王国から追放されるとき、彼女を、彼女の偶像崇拜者である司祭たちと共に、また彼女を助けた全ての者と共に、処刑することもイングランド

の貴族たち、裁判官たち、統治者、人々の義務であったと私は、恐れずに確信するのであります。

しかし、現在、この議論が関係していることについて討論することは出来ないのです、私はより良い機会までそれを省略せざるを得ないのであります。そして、閣下たちのことに戻りますと、私は言いたいのだが、もし貴方が主イエスに告白し、洗礼を受けるならば、当然、貴方は、神の宗教の監督が、貴方の役目に属していると言わなければなりません。そして、もし貴方が、貴方の手中で、神が剣を上記でのべたような理由のためにおくことを知ったなら、そして、もし訓戒の後も彼らが、これを執拗に続けたら、その時、貴方は、しつようで、厚かましい偶像崇拜者たち(たとえば、あなたがたの司教たちすべてであります)を罰することは、貴方の務めであることを否定するのではなく、これは義務なのであります。私は、貴方の傲慢なる高位聖職者たちのむなしい弁護が、何であるのか知らないわけではありません。彼らは第一に教会会議や皇帝の同意によって、この世の管轄権すべてから免除される特権を要求するでしょう。そして、第二に、彼らが明らかにマナーにおいても、宗教においても、不敬虔で、邪悪で非道であると非難されると

16) ヨシュア記22章参照。

17) 拙著挿入。

18) Edward VI (在位1547-1553) ヘンリー8世と第3王妃ジェイン・シーモアの子。改革派の影響のもとに成長し、敬虔なプロテスタントとして1546年9歳で即位。即位式で、[新しいヨシア王]と称め讃えたT.クランマーの期待に応え、伯父サマセット公の摂政政治のもと、保守派を排除し、N.リドリ、H.ラティマ、J.フーパー等を登用し、教会改革を促進した。カトリック的な6箇条を廃棄し、聖餐における兩種倍餐と聖職の妻帯を許すと共に仮信条協定の結果追われたM.ブーツア、M.P.ヴェルミーリ、J.ア・ラスコらをイングランドに招いて改革遂行を助けさせた。49年に第一礼拝様式統一法を発令して最初の祈祷書を刊行させ、3年後によりプロテスタント的色彩の強い第2祈祷書の出版を許した。53年には英国教会の新しい教義的立場を表明した42箇条が発令され、イングランドにおける宗教改革が定着するかにみえたが、同年病弱のため没した。

19) 拙著挿入。

20) 拙著挿入。

21) オムリ王朝の王アハブの妻。アハブとの結婚はオムリ王朝がフェニキアの沿岸都市との外交関係を結ぼうとした政治的なものであった。父がツロの神バアルの祭司であったので、彼女もバアル礼拝に熱心で、サマリアにバアルの神殿を建て、バアル預言者を保護し、主なる神の預言者を迫害した。カルメル山上で、バアルの預言者とエリヤが対決した。アハブの欲しかったナボテのぶどう畑を手に入れるために策略によってナボテを殺したが、エリヤに滅亡の預言をうける。これはエヒウ革命の時に成就した。

22) Mary Tudor(在位1553-1558)ヘンリー8世と最初の妃キャサリンとの子。母の離婚問題が生じてからカトリック教徒のメアリは冷遇された。異母弟エドワード6世のあとを受けて即位した。1554年スペイン王フェリペ2世と結婚したために各地で反乱が起こったが、これを抑圧した。彼女はカトリシズムの復活のために努め、異端令を復活させ、プロテスタントを迫害した。

き、彼らは長く確立された事柄を突然、改革される事が出来ないのではなく、たとえ、彼らが、腐敗しても、時の経過につれて、彼らは秩序を保持すると約束することを断言することを恐れないし、恥じないでしょう。しかし、数語で私は、答えますが、神の法に反対して認められた特権は、たとえ、この世のすべての教会会議や人々が、認めたとしても保存されないであります。しかしながら、神の法に反した偶像崇拜者、殺人者、偽教師、神を冒瀆する者たちは、前に述べたように、罰を免れようとします。ですから、神が次のように言うとき、彼らが特権を要求することは、むなしなものなのです。「殺人者を、あなたは私の祭壇のもとから連れだして、処刑することができる。」²³⁾と。そして、彼らが約束する秩序や改革については、サタンが子どもや奴隷たちであれば、その性質を変えられることが期待されるでしょうに。

この答えは、私は疑わないのだが、分別があり、敬虔なる読み手には十分なものでありましょう。しかし、最後まで、彼ら²⁴⁾はさらに彼ら自身が混乱をするのであり、閣下たちは、非常に明かに神からの彼らの墮落と背信において、なにをするべきかをより一層理解するであります。私は、彼ら自身に尋ねます。この彼らの免除、あるいは特権に対し、彼らは、何の確信があるのでしょうか？ だれがその事の創造者なのでしょう？ そして、それは、どのような実を結んだのでしょうか？ 先ず、私は言いたい。神について、彼らは、神がそのような特権の創造者であると証明される確証もないし、確証もできないのであります。しかし、反対のことは簡単にわかります。というのは、歴史が明らかに証言するように、イスラエルにおいて、神の秩序を確立した神は、アロン（聖職において、キ

リストの象徴であります）をモーセに従わせ、そして裁きにおいて、神は恐れず彼を呼んで、彼に彼の邪悪な偶像崇拜である行為について認めさせ、考えさせました。それは、次のように書かれています。「それから、モーセは、彼らが作った子牛をとって、それを火で焼き、粉々に砕いて、水の上にまき散らし、イスラエルの子等に飲ませた。」（ここに偶像崇拜のむなしさと忌まわしさを述べているのですが）。そして、その後、モーセはアロンに言いました。「この民があなたに一体何をしたというので、あなたはこの民にこんなに大きな罪を犯させたのか。」²⁵⁾と。こうして、私は言いたいのですが、モーセは、アロンを呼び、民全ての破滅の罪を非難しました。そして、モーセは、神がモーセをイスラエルの12部族の名を彼の肩と、胸に負うべき大祭司として任命され、彼らのため、生け贄を献げ、祈祷し、嘆願されるように命じられた時、完全に理解しました。それは、モーセの高位が非常に高いもので、彼だけが、非常に聖なる場所に入れることを知ったのです。しかし、彼の務めも彼の高位も彼が罪を犯したとき、裁きから免れることは出来ませんでした。もし、このとき、アロンが聖別されていなかったら、そして彼がモーセに従っていたら、神の口を通してモーセは、アロンが任命された高位を完全に理解し、彼は（偶像崇拜の罰の²⁶⁾裁きにおいて、彼を恐れることなく呼び出し、彼が行った邪悪な事柄を答えさせようとしたであろうと私は思います。しかし、もし、この答えが、十分でないなら、聖霊がこのことをさらに証言するでしょう。

ソロモンは、大祭司であるアビアタル²⁷⁾の特権を取り除き、彼にすべての働きをやめて、私人として生きるよう命じました。今、もしソロモンが、宗教的熱情により祭司の世俗行

23) 出エジプト記21章14節「しかし、人が故意に隣人を殺そうとして暴力を振るうならば、あなたは彼をわたしの祭壇のもとからでも連れ出して、処刑することができる」を参照。

24) カトリック側の高位聖職者。

25) 出エジプト記32章20-21節参照。

26) 拙著挿入。

27) アロンから第十一代めの祭司。祭司アヒメレクの子え、サウルの怒りにふれて父と85名の祭司が殺害された時、ただ一人逃れ、ケイラでダビデに付いた。ダビデの老年時には、アドニヤの王位継承の野望に協力した。彼はソロモンによって追放されたが、ダビデに尽くした功績の故に、死を免ぜられた

政官の管轄権を免じたなら、アビアタルを怒らせ、罪を犯すこととなります。というのは、彼²⁸⁾は、ダビデの前に、聖別され、契約の箱を運んだからです。しかし、神は、ソロモンのことをとがめないのでも、アビアタルが彼の務めの理由で、なにか特権を要求するのでもなく、むしろ、聖霊がソロモンに次のように示すのです。つまり、「ソロモンは、アビアタルが主の祭司であることをやめさせた。そして主のこの言葉は、エリの家について語ったことが実現したのである。」²⁹⁾そして、アビアタルは、本当は共謀によって死を受けるに値するのに、大いなる神の恵みによって、そのことを免れたことをその時、思いました。アビアタルが王の裁きの他に従わなかったのは、以前、アビアタルは神が発した宣告の実行者として任命されていたという理由があったからなのだと思えます。そのことは、エリとエリの家に対して宣告を発した神が、偶像崇拜者、売春婦と遊ぶ者、神を冒瀆する者は、神の王国内に属さないし、神の教会内のいかなる支配も関わることを赦されないと発したことを各人が考慮する必要があると思うのであります。今、もし神の宣告が実行されなければならないので、宗教的熱情や務めがアビアタルを救わないというのなら、人によるいかなる特権が、神によって宣告された罰に従わない悪人たちを守ることが赦されるのでしょうか？私は、そのように断言するほど愚かな者はいないと、思うのです。というのは、律法の時代の祭司たちは、世俗の力に従順を示す義務があったというのはより明らかなことだからです。そして、もしその

祭司職のメンバーが、罪のあることを見つければ、その者は、神が行政官の手中に渡した剣の罰に従うのです。

そして、父なる神のこの法をキリストが無効にしたのではなくて、むしろ、認め、神ご自身のため税を払われるべきと命じ、そして、主の心を完全に知っているペトロは、彼の手紙の中で次のように書いています。すなわち、「人間の立てたすべての制度の法に従いなさい。(彼は、神の命令にはっきりと反対するようなものは除いたのですが)、それが主のために、統治者としての王であろうと、あるいは、悪人たちを罰し、善を行う者をほめるために王が派遣した統治者であろうと服従しなさい。」³⁰⁾と。そのことは、使徒パウロが非常にはっきりと言っています。すなわち、「それぞれの人が、上の権威に従うべきである。」³¹⁾と。その聖書箇所は、キリストも使徒たちも、今日、教会の者たちが要求している免除や特権を何も確認していないことを明確にしています。しかも、それは使徒の時代の後、ずっと長い間、原始教会で知られていなかったことであります。キリストの昇天から400年が経ち、腐敗が増大していたコンスタンティノーブルの教会に仕えていた、クリュソストモス³²⁾は、次のように使徒の預言を書いてあります。すなわち、「この教えは、(彼は言っているのですが) 教区付き司祭たちと呼ばれる者たちにだけあるものではなくて、祭司たちや敬虔な宗教的人間にも属するものである。」と。そして、彼はこの後に、「使徒であれ、福音書記者であれ、預言者であれ、あるいはあなた方だれであっても、この服従

28) アビアタル。

29) 列王記上2章27節参照。

30) ペトロの手紙一2章13,14節参照。

31) ローマの信徒への手紙13章1節参照。

32) Chrysitomos(347-407)コンスタンティノポスの主教。4世紀の代表的教父。早くから修道生活を志し、パコモシオスの修道規則に従って隠修士としての修業を積んだ。386年にアンティオキアで聖職に就く。説教の巧みさからクリュソストモス(黄金の口)と呼ばれるが、この名称が用いられたのは6世紀のことである。聖書解釈に関してはアレクサンドリア派の比喩的・思弁的解釈を斥け、アンティオキア派の伝統に従い、

字句通りの解釈を主張した。コンスタンティノポリス主教ネクタリオスの死去に伴い、皇帝アルカディウスの要請でその後任に就任した。これはまったくの予想外の人事で、教会政治家としての力量に乏しいクリュソストモスはアレクサンドリア教会とアンティオキア教会の激しい抗争の渦中に巻き込まれた。首都の教会の規律を立て直すうちに、皇妃エウドクシアをはじめ多くの敵を作った。クリュソストモスは二度にわたって追放され、ポントスで、衰弱のために没した。彼は東方正教会では最も尊敬されている教父である。

から免れられることは出来なかった。」と付け加えています。これについて、クリュソストモスは、神が世俗の権力の服従からだれも免れるとは理解していないし、そして神が、今日、要求しているローマ・カトリック教徒たちが免除や特権の創始者であるとも理解していないのであります。そして、このことは、キリストの後の原始教会の判断であり、不変の教えなのであります。

《以下は次号に続く予定。》

